

編：泉 孝英 編集協力：八幡三喜男，長井 苑子，伊藤 穰，Simon Johnson

ポケット医学英和辞典
第3版

書評者：福澤利江子（筑波大学助教・国際看護学）

わからない言葉があればすぐにスマホやパソコンで検索して（それも無料で）調べる習慣がついている私たち。医学英和辞典を手元に置く必要があるのかと時代錯誤に思えるでしょう。日進月歩の医学分野で一般的に使われる用語を67,000語に集約し、それも、医学だけでなく薬学・検査・看護・介護の分野でも使えることをめざして作られたなんて、そんな辞書が可能なのだろうか？これがこの辞書を知った時の私の初めの正直な気持ちでした。同時に、インターネット上の情報収集は、いくら便利で、頻繁に利用し、その場は用を足しても、断片的で頭の中を素通りする気がして、専門用語が自分の言語体系として血肉になる感覚が得られにくいことが、以前から気になっていました。

本書はポケット判でとてもコンパクトなので手に収まりが良く（手触りも良く）、机上でもまったく邪魔になりません。何よりも、充実した内容と、印象強く理解を助け知識を増やす効果にはただただ驚いています。それに、医学以外の領域にも深い関心と配慮が本當に向けられているのです。例えば、“nurse”（看護師）という言葉ひとつをとっても、“community nurse”（地域看護師）と“pub-

lic health nurse”（保健師）の区別が的確です。“assistant nurse”（看護助手）・“practical nurse”（准看護師）・“registered nurse”（看護師）・“nurse practitioner”（ナースプラクティショナー）の区別や表記、さらにリエゾンナース、リンクナースなどの近年使われるようになった用語にもわかりやすい説明が付いているのです。続いて次の“nursing”の項にも、“nursing home”（老人保健施設）や“nursing ethics”（看護の倫理）など、日本語でなじみがあったても英訳しにくいような言葉がきちんと載っています。かといって、医療者におもねるのではなく、nursingのそもそもの意味は「(1)授乳，(2)看護，養育」というように、社会常識的な見解も端的に示しています。

私自身は助産学が専門なのですが，“uterus”（子宮）の項には、フランスの産科医の名前にちなんだクヴレール子宮、重複子宮・中隔子宮・単角子宮の定義など、医学事典でもないのに、図もないのに、短い言葉だけで明確に定義されているのです。他にもBCGワクチンは昔は経口投与も行われていた、など、非医療者にもわかりやすい言葉で、読者の興味を引く記述にも惹かれ、ページを開き読

むたびにすっかり好きになりました。

このコンパクトさの奥にいかほどの配慮や努力があるのだろうかと感じ入るばかりですが、本書の背景を知り納得しました。日本が戦後に米国から情報を輸入し医学が大きく発達した最中(1967年)に本書の初版は刊行されており、その後も50年間の時代の変化に合わせた改訂がされ、由緒ある、長い歴史を持つ辞書なのでした。さらに、“New England Journal of Medicine”を毎号読破していた医師による綿密なアドバイス、本書の編纂のために日常の生活態度から改め、診療の合間に執筆した故・渡辺良孝医師の熱意が込められ、その後も引き継がれて本版に至っているそうです。

おそらく今後、医療系の電子辞書などの電子媒体にも今回の新たな版が反映されていくことも楽しみです。でも、この時代にあえて紙の医学英和辞典を手元に一冊置くことで得られる思わぬ勉強効果と楽しみも、読者の皆様とぜひ共有できれば幸いです。

●新書判 頁1282 2017年8月
定価：本体5,000円＋税
[ISBN978-4-260-02492-1]
医学書院刊